

# 秋 田 県 の 仮 面

## —東北の仮面図録・補遺—

嶋 田 忠 一

### はじめに

さる11月30日で終了した、「東北の仮面」展は、県内のみならず、東北五県の関係各位の御協力により、当県ではまたとない質量を出陳できた展示であった。そうした出陳資料のほとんどは、同展『図録』として刊行されたのであったが、諸般の事情により、県内資料の割愛多く、誠に不本意なものであった。本稿では、その欠点を補うとともに、展示の成果を取り入れて再考すべく筆を執った。従って、展示公開されなかったもの、展示終了後に新たに調査したものなども含めて構成されていることを付言しておく。

なお、ここでは、芸態によらず、様式による分類とし、舞楽面・翁系面・鬼神系面・男面・女面・霊系面獅子頭の順に項を立てた。また、それぞれの項ごとの概説は図録に掲げた参考文献などによっていただくこととし、これを略した。

また、奉納神面・鬼板・ナマハゲ面・天狗面については、別の機会に譲ることにした。

本文は、列品私見であり、番号は後掲の写真番号と対応する。本文及び図版には、適宜参考写真を組み入れた。列品紹介の1行目は〔番号、資料名、所在地・所有者……寸法（上下×左右×前後。獅子頭については、前後×左右×上下）〕と表してある。また、図版の◎印は秋田県有形文化財を表す。

### 舞楽面

#### 1. 陵王 象潟町・金峰神社 37.2×16.8×18

金峰神社の陵王は、全体のバランスからみると龍体が小さくまとまっている。龍体が本体の鉢の部分から立ち上がるように見え、翼は様式的である。山形県南陽市・熊野大社の陵王が、まことに本格的な遺品であるに比し、崩れのある点が指摘されよう。上下に伸びる傾向が強く、髪は彫出はない。また、頬も削ぐような、やせた彫りである。動眼・吊顎の関連はなく、それぞれ別個に本体に紐で取り付けられている。龍体の胴部に刳りがある。表面は金泥様の仕上げで裏面は布貼り。能生白山社の遺品より上下に長いと言われ、室町末期の作<sup>1)</sup>とされる。山形県新庄市個人蔵の陵王<sup>2)</sup>を参考として掲げた(図版)が、これには不明な点が多い。新庄市のものには、「□慶作」□化四年□と読める貼紙がある。



牙のある天狗面



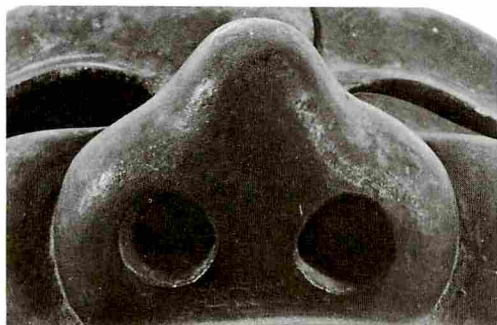
陵王・納曾利面箱

2. 納曾利 同 前 32.4×17.8×15.2

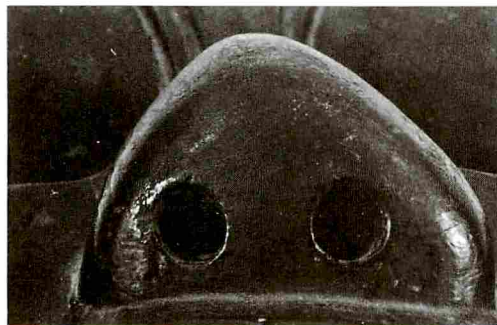
県内では、陵王とともに、同種唯一の遺品。これも上下に長い作。吊顎は後補で、牙の彫出はない。耳の表現は弱く、装飾的である。裏面は布貼り。

3. 二ノ舞一咲面一 能代市・竜泉寺 25.3×19.8×14.7

もともとは秋田市上新城・高倉山滝山寺（廃寺）の什物であったという。損傷のある遺品であるが小鼻や耳の隈には当初の古い塗が認められる。円満寺の咲面が弧状の眼形なのにくらべ、ゆるいへ字状となっている。また、顔面全体に皺を刻むのも特徴である。裏面は、ほとんど生地が露出するものの、古い漆がけの部分もわずかに残っている。後に削りとられたためと考えられる。もう一方の腫面と同一作者か。腫面の朱漆銘に照して、年代を徳治2年とすべきか。



咲面の鼻



腫面の鼻

4. 二ノ舞一咲面一 西仙北町・円満寺

32.7×24.2×13.3

近年欠失部の修復が行われたもので、彩色等はほとんど剥落の状態にある。県内では、「写実的な作風はその表現目的の真髄を把え、奈良手向山神社や名古屋熱田神宮のそれに遜色のない佳作」と表現されてい

る。東北地方では最も大ぶりで、本格的なものと考えられるが、熱田神宮の1面や手向山神社の胡徳楽瓶子取の咲形とは若干異り、ややおさえ気味の笑いにみえる。また、歯列のほか舌を口内奥に見せ、腫面との対比を表すような点もある。口を上下に広げず、左右に広げるところも特徴となる。

円満寺は、現在曹洞宗に属するが、「もとは修験道場らしく、この面も修験者によって将来されたもの」と推されている。このほか、同寺につき、北上市の司東真雄先生より、平安時代に花巻市との関係がなかったか、との問い合わせもいただいているが、全く辿れない。ともあれ、舞楽面中の最もポピュラーな面が確実にそこにあり、舞楽とは似て非なるものであったかも知れないが、その所作は大いに庶民に受け入れられたものと想像されるのである。鎌倉時代。

5. 二ノ舞一腫面一<sup>31)</sup> 能代市・竜泉寺 28.6×20×14.2

この腫面は、上脛の腫れをとおりこし、額全体にまで及び、全体の形も左右不均衡となっている。向かって右側下方に集束する如く、苦痛に歪み、病的な相を一層強く見せている。しかし頬や皺の刻みには様式的な面も感じとれる。あるいは、この点で、県指定になっていないのもあろうか。

裏面には朱漆銘がある。筆者自身が撮影した赤外線



咲面の耳



腫面の耳

写真では干支部分が不明であった。秋田県には未だ赤外線テレビ受像機もないので、岩手県立博物館の御好意にすぎり、ようやく解決することができた次第である（岩手県博の御世話になったのは、後述の「永和」銘の獅子頭も同様である）。それによると、これまで「高倉山滝山寺」舞楽面「徳治二年丁未五月日」と読まれていたものを「奉造□瀧山寺」舞楽面也「徳治二年丁未三月日」とすべきことがわかったのである。

6. ニノ舞一腫面一 西仙北町・円満寺

32.7×25.4×14.4

同じ腫面でも表現となるとかなり異なるものがある。徳治銘のものが様式的で、こちらは写實的にみえる。肉取りや皺もやわらかく、鼻のつけ根から頬にかけての強い皺は、みかけの静かさを破り、苦痛をたたえてみえる。

翁 系 面

7. 翁 象潟町・浄専寺 18.9×15.2×7.9

秋田県有形文化財に指定され、「永禄二年」実相坊作の刻銘をもつ樟材の逸品である。写真では黒色尉のように見えるが、ところどころに白色が残る翁面である。また、眉が、本来のボウボウでないため、外見では新しいものに見られがちである。上下唇と顎に留釘が残っている。眼窩、鼻翼部分を深く彫りあげている。本面の特徴は、多くの翁面が額ないしは上部で大きく張るのに対し、頬の辺りで巾をとる点にある。従



刻銘

って額が狭く、下ぶくれの傾向にある。

8. 翁 二ツ井町・成田克巳 19.5×16.4×7.6

大ぶりの本面と小ぶりの父尉を蔵し、ともに安東愛季<sup>5)</sup>が松山城下総鎮守の古四王神社に奉納したものと伝えられる。同社焼亡と共に所有者が変わり、現在に至る。長い間、神聖視され、他見に及ばぬ事情にあったが、今回の展示を機に公開のはこびとなったものであ

る。父尉と好対比を見せるが、父尉にくらべ、やや時代が新しいものと判断されている。翁面としては最も大ぶりの部類に属するが、皺の刻み、特に額の辺や眉間の小皺が弱い。上下とも歯を刻まず、顎の損傷部に植毛があったと推される。室町末期。

9. 翁 象潟町・鳥海山日立舞

横岡で伝承する番楽面であるが、現在用いられている翁面よりやや古いもので、「式三番」と称して黒色面とともに蔵されている。顎に竹釘が残る。

10. 翁 秋田市・生面神社 19×14.3×7.5

生面神社の一群は、桃山から江戸初期にかけての面がまとまっていることで知られるが、本面と三番叟、嘘吹はやや崩れた作風とみられる。小鼻を大きく、武張った彫り方をし、顎に釘を残している。ヒゲは墨描き。切り顎は両側をカットし吊る様にみえる。眼形の隈を大きく、歯は上歯2枚彫出。

11. 黒色尉 平鹿町・西田万治 18.9×13.5×7.3

同家所蔵2面の内の1面。翁と三番叟との対としたようであるが、翁に当たる面は尉である。歯は上に2枚刻む。植毛は眉と顎にある。眉の線が1本の線でつながり、眼形の隈取りが頬にかかる皺となって流れる。

12. 黒色尉 秋田市・生面神社 18.4×13.4×6.3

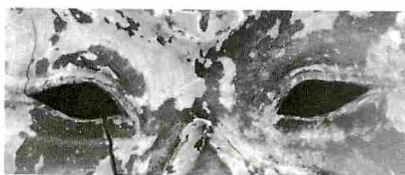
額の皺4本を刻むが眼尻まで届かず、額で切れている。切顎は本格的なものではなく吊り顎であるのは同社翁面と同工。上唇に1条の釘痕、顎に数本の釘痕がある。

13. 黒色尉 象潟町・鳥海山日立舞

同舞「式三番」の翁と同工に見えるが、相違は頬の渦巻状の皺刻みにある。写真13右の参考品（鳥海町）のそれに近いが、やや小ぶりであることと鳥海町のがボウボウに対し白の植毛をもつ点が特徴。また、鳥海町の方は眉間の小皺1本が強く表現されるほか、切顎も大らかさを持っている。

14. 父尉 二ツ井町・成田克巳 17.5×14.6×7.4

写真8の翁と対になって残る。大ぶりの翁に対し小ぶりの父尉と、対比も見事である。杏仁形の眼は刀の



杏仁形の眼

切れの良さを示している。室町初期。

鬼神系面

15. 鬼神—飛出— 湯沢市・金剛院 23.4×20.6×12.4<sup>5)</sup>  
愛知・東観音寺、福井・熊野神社の鬼神に似るもの  
のようで、南北朝時代と推定される。割れは早い時期  
のもので、劣化著しい。榿材。眼形隈、鼻、齒などに  
丹を残す。以下の4面とともに蔵されているが、使用  
目的等については不明、今後の調査に期待したい。

16. 鬼神—飛出— 同 前 23×14.1×7.3  
顎・鼻・眉間先端部を欠く。齒・舌・鼻などに白土  
と丹を残す。眼窩を深く刻む。鼻翼から下唇にかけて  
なめらかに深くくぼめる。頬の左右に2条の山形の線  
刻あり、19・20と同じ表現をもつ。室町時代。

17. 鬼神—癒見— 同 前 20×14.2×6.2  
眉を屹立する如く、頬と顎を突き出す如く彫出。白  
土や丹の残りは前二者と同じ。眼は上方を穿ち、上眼  
である。裏は荒くノミ痕を残す。室町時代。

18. 鬼神—嘘吹— 同 前 19.5×15.4×8  
左右不相応で嘘吹タイプ。額と口の皺寄せに特色が  
ある。眼・皺に白土・丹を残す。室町時代。

19. 鬼神—飛出— 同 前 22.4×15.5×8  
金剛院5面中、植毛釘を残すのは、本品のみである。  
眉、上下唇、顎などに釘ないしは釘跡を残している。

20. 鬼神—飛出— 稲川町・酒井大美家  
20.7×15.6×9.7

彫り深く、抑揚の強い1面である。頬の両側端にあ  
る山形文は、16・19にも通ずるが、前二者が鋭角的で  
稚拙な線刻であるに比し、本品は大きく頬にかかるほ  
どである。これらの山形文は鬼神系面に見られるよう  
である。頭髪、口髭、鼻毛等の毛描きが残っている。

21. 鬼神—癒見— 雄物川町・上法快晴  
23.7×19.2×13.1

眼窩の深いこと、顎をグッと突き出すこと、鼻翼の  
張ること等に特徴あり。全体にゆったりとした、丸味  
のある彫出。全面漆がけであるが眼形部に丹の如きも  
のがある。弁慶が打ったものとの伝あり。眉の彫出、  
眉根の渦巻き状は獅子頭の様式などを援用すると室町  
末期の作と推定されるが如何であろうか。

22. 鬼神—不動— 雄物川町・佐藤利兵衛  
19.7×14.9×7.4

不動タイプの鬼神か。桐材に胡粉を塗り、茶褐色の  
仕上りを思わせる。眉や髪際に火炎文を彫り出す。頂  
中央には星形模様を彫る。

23. 鬼神—癒見— 象潟町・竹内徳雄 19.4×15×7.8  
同町諏訪神社と縁の深い竹内家と聞かす、同社祭式  
と関連のあったものか。古くから「山の神様」として  
扱われてきたとだけ聞かす。小ぶりな、すっきりとした  
肉取りをみせる。鼻翼をふくらませ、頂は彫出せず。

24. 大癒見 秋田市・生面神社 20.6×15.4×9  
山谷番楽名では「戸隠」。全体に濃い朱色で塗りあ  
げられ鼻翼をふくらまし、極度に緊張した表情である。



15 の山形



19 の山形



20 の山形

口を真一文字にへしめ、顎がグッと丸く前に突き出る。眼球には金具をはめるなど皺や肉取りのいずれも緊張感をみなぎらせている。「大信」銘。

25. 小壺見 秋田市・生面神社 19.8×15.9×8.2

山谷番楽名では「龍宮菩薩」。大壺見より小作りながら、鋭さや恐しさは小壺見がまさるといわれるが、本面では彩色もうすれ、また生地も露わであったりするため、比較できない。しかし小壺見としての口のへしめ（口のかみ合わせ両端が下がる）や眉間の皺寄せ丸い眼球金具などには大壺見と対比できる点がある。なお、本面裏には越前出目家初代満照のものと思われる刀刻がある。同刻は57、59にもみられる。桐材。

26. 雷 秋田市・生面神社 22.1×14.6×8.9

山谷番楽名では「般若」。上下に2列の牙をもち、口の周囲に三角形の火炎を表すとみられる彫りがある。しかし眼球の金具は顰や雷型のものではなく、牙飛出など飛出型のものである。また、頭髪や鬢の毛描きも認められる。ここでは「雷」としておく。

27. 鬼神 皆瀬村・板戸番楽 20.3×16.7×9

番楽の中では船頭役として、主人公を対岸に渡す役。眼に丹を残す。鬼神一鉢巻形で鎌倉から室町時代頃のものとしては京都、愛知、静岡、岐阜などのものがあるようで、しかもそれらの特徴は鉢巻・目に金属板を貼りつけたり、目はさがり目であるなど、本面とはどうも直接的に関連づけられない点が多いのであるが、ここではとりあえず鬼神系の面として把握しておき、更に手元の資料を増してから明確にしたいと考える。

28. 鬼神一壺見一 天王町・八坂神社 22.5×15.9×7.7

同社蔵番楽面中の1面で「山の神」と称される。全面をツヤのある漆で仕上げられているが、後補と思われる。鬼神としては崩れた部分が多く、飛出た眼の彫りとへしめた口に特徴がある。クセのある皺出し肉取りは如何にも土着性豊かな番楽の性向を感じさせる。

男 面

29. 老年一皺尉一秋田市・生面神社 20.3×14.4×8.3

桐材、額両側面、上下唇、顎にそれぞれ植毛あり。山谷番楽では「松翁」。皺尉とも。目眦から頬を包みこむような皺など、全面をおおう皺模様の特徴がある。褐色の彩色の中に、上下の歯を刻み、どことなく笑みをたたえる老年の面である。

小鼻がやや開き気味。皺の彫出もそれほど強くはない。全面に胡粉が浮き出ているため、彩色は、不明。桐材。

31. 老年 仁賀保町・遠田嘉男 18.1×13.1×7.44

同町水沢で行われる小正月行事「鳥追い」の時に着用されるもので、写真54とともに「高砂面」として伝存する。もともと左右不相応をねらった面のように、眉間よりグッと鼻をねじまげる様式をもつ。ここでは、所蔵地の伝承をたよりに男面として掲げるが、もう一方の鑑面があるいは男面になるのではないかとも思う。男女一對の面は、古くは大地の活力を復活させる意味をもち、田遊び・田楽などと呼ばれる芸能の場でも用いられる。そこでは大らかな性的所作が演じられ、男女の面は、それぞれの神格を表現したのである。神格化の特徴は、後世の道化面にみられる、鼻を曲げる点にひとつあると聞く。

32. 老年一尉一 秋田市・番場 茂 20.8×13.8×7.4

番楽面として使われていたようである。眼尻から頬にかけてと鼻翼から口の端にかけての辺に老年を思わせるものがある。同時に、額の広さや皺の少なさも目につく。口元には笑みがただよう。

33. 老年一尉一平鹿町・西田万治 19.8×15.1×9.5

前掲黒色尉と対をなして蔵される。三番叟同様写し崩れがみられるが塗・彫などは本品が優れている。

34. 老年一尉一天王町・東湖八坂神社 18.4×13×6.5

明治期の什物書上にみえるという「翁面」とあるのが本面である。箱書には「よこや治兵衛」元禄拾年丑六月七日「き志ん上ヶ候」とある。眼形や皺をみれば翁に近いともみられるが、ここでは尉として掲げておく。

35. 老年一小尉一天王町・八坂神社 20.7×15.7×9

額左右植毛近くに墨書あり、それぞれ「武州江戸ニテ」慶安四年八月吉日、「豊村内□□」源家重作」と読める。裏には焼印あり「天下一河内」と読める。河内作の尉が、なぜ八坂神社に至ったのかは不明。彩色はなく生地のまま、植毛は根元を残し切れている。彫りの技はすぐれているが、打ち損じの故か、生地の仕上げのみ。また、木取りの墨跡がはっきりと残る。

36. 老年 皆瀬村・板戸番楽 21×13.7×6.8

鼻をへし曲げ、眼をさげる道化面。眉と口ヒゲは布紐。

37. 老年 鷹巣町・武内 21.3×12×4.7

30. 老年 秋田市・生面神社 20.5×15.3×7.2  
 これまで「尉？」とされてきたが、それにしては福々しささえ感じられる老体である。下歯5枚を刻み、かなり面長な番楽系統の面と思われるが不明。写真52と対のところから、あるいは男女の神格化とも考える。52にくらべやや荒い彫りとみえる。
38. 老年 秋田市・生面神社 18.8×14.3×6.3  
 桂材。額に太い皺を刻み、眼窩を深くとる。口を丸くつばめて突き出す空吹き型。
39. 老年 皆瀬村・板戸番楽 15.5×14.8×5  
 俗に言われる地方作の面は、本格的なものでないだけに種々雑多なものがみられる。この道化面も面の作り方を知る上ではまたとないものである。この面はまず大まかな木取りをした上で、頬や顎、額、眉間などの肉上げを、大鋸クズをペースト状に練り合わせたものを付着させ、胡粉を塗り、更に和紙を貼り、その和紙に彩色を施すという方法である。また、額の部分は、木取りの際の失敗からか、三角形の補材で継いでいるが、この部分では胡粉の上に布を貼り、和紙をその上に貼るという手法をとる。稚拙な面ではあるが、何か庶民の熱意といったものが感じとれる。
- 40～45 老年～青年 仁賀保町・上小国番楽  
 40は翁、41は番楽では荒舞（武士舞）用でベシミ型。42は若武者。43は道化役。44は姥に近いタイプか。45は空吹き。桐を主とする。
46. 老年 象潟町・水岡番楽 20.6×18.5×10.3  
 桐材。口をあげて、舌を出し、大きく笑う。鼻から出した白紙は鼻水を表わし、鼻タラシ面という。大ぶりの面で表現豊かなものである。
47. 中年 象潟町・水岡番楽 18.7×16.9×4  
 夕顔で作った道化面。韓国の瓠面に似る表現を持つ。
48. 老年 象潟町・水岡番楽 19×13.1×6.5  
 納曾利型の道化面。唯一の納曾利面を持つ、小滝・金峰神社とは隣り合う地域であることから、これを模して番楽面にしたかと考えられる。

## 女 面

49. 若女 秋田市・生面神社 19.8×13.4×7.4  
 これまで「慈童」とされてきたが、毛描きなどから推して「若女」とすべきと考える。桧の類。
50. 若女 秋田市・生面神社 20.4×13.7×5.8

偏平なタイプの若女。汚れの多い面であるだけに今後の保管には充分気を付けたいものである。「イセキ◇」銘をもつ。

51. 中年 秋田市・生面神社 20.4×14×7.4  
 山谷番楽では「巴御前」。桧の類。
52. 若女 鷹巣町・武内 19.1×14.3×6  
 桧の類に胡粉を塗る。唇に丹らしき赤が残る。
53. 若女 仁賀保町・上小国番楽  
 生地に眉、髪際、眼形などを墨書し、面打から彩色までの過程をうかがわせる。
54. 老年 仁賀保町・遠田嘉男 15.5×12.5×5.9  
 高砂面の1面。額に皺を2本刻み、額から眉間にかけて洗面の如く肉取りをする。表裏とも黒漆をかける。6枚の歯を上刻む。眼に白土と丹が残る。
55. 老年一姥一 秋田市・生面神社 19.1×13.6×7.8  
 苦しそうな表情をする姥面。裏の刻銘は「洗手」兵庫、中央にやや大きく「一透作」。これは、宮城県加美郡の薬菜神社蔵の尉<sup>7)</sup>と同銘。中村保雄先生によれば、尉と姥を対比してみれば、あるいは一対であったかも知れないが、ということであった。
56. 乙 秋田県立博物館 17.4×12.8×5.5  
 岩崎番楽面「乙」。

## 霊 系 面

57. 山姥 秋田市・生面神社 20.6×15.3×7.2  
 山谷番楽では「五郎」。桐材。目に金具。越前出目の刻印あり。男面とすべきか。
58. 橋姫 秋田市・生面神社 19.9×14.4×7.6  
 山谷番楽では「鈴木三郎」。「天下一是閑」の焼印。桧の類。眼に金具。
59. 神体 秋田市・生面神社 19.7×13.6×7.2  
 山谷番楽では「十郎」。越前出目の刻印。

## 行 道 面

60. 大日如来 鹿角市・晴沢 25×18.8×10  
 鹿角市八幡平地区に伝わる大日堂舞楽・「五大尊舞」に使用。金胎両部大日如来2面、化道面4面がある。ここに掲げた面は胎藏界大日といわれているものである。桐山宗吉氏の『菩薩の面』『同補遺』では最北部のものとの表現がある。しかし、参考にあげた、会津<sup>8)</sup>恵日寺や米沢市成島八幡社の菩薩面と比較するならば

かなり写し崩れのある面であることになる。化道面にしても天冠台のみを彫出する如くで、地方作といってしまうとそれまでだが、行道面の地方でのあり方が、地方芸能と深く関わっていたものとみられよう。

- 61. 八幡 同 前 25.5×21.2×11.7
- 62. 不動 同 前 23.3×19.7×10.7
- 63. 普賢 同 前 24.2×21×12.1

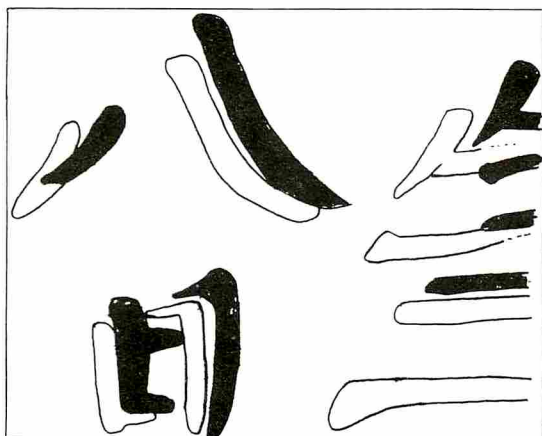
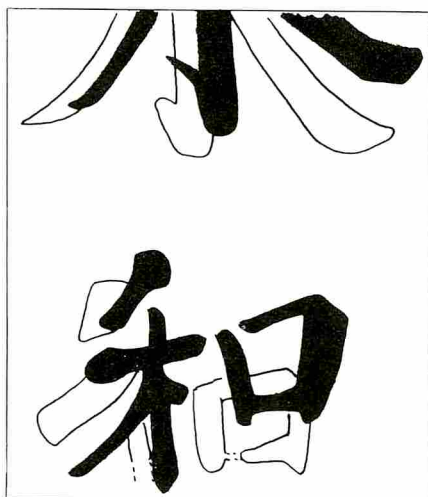
裏に「ホミヤウ」の朱銘あり。

- 64. 文殊 同 前 24.5×19.7×12.1
- 裏に「タトウクラウ」の朱銘あり。

獅子頭

- 65. 湯沢市・加藤武夫

耳は柵立、眼裂大きく耳元まで達する。眼窩は内側



新田銘の実際(黒字が新銘)

に喰い込むようになっている。舌は別材で紐でとめる。前面上下とも6枚の歯を刻み、側面には丸い牙を彫出する。頬の肉取りや唇のうねりも大きくカサ高な方、古風なものである。しかし、たとえば、眉毛の彫出と眉根の渦巻文、それに側面のそがれたような彫りは、全体の丸味とは相入れない要素である。その上、眼形の彫出も底部では鋭角的な線となっている。古い朱塗は左方上唇部に若干のぞいているが、全面は後補の黒漆でおおわれている。裏面頭部には後補の朱仕上げの上に墨銘があり次のようになっている。「永和二年 丙辰六月八日 生年六十六 貞遍作之」

この墨書銘については、岩手県立博物館の御協力による赤外線テレビで、古い銘とほぼ同じであることがわかった。古い銘には「生年六十六歳」とあることがわかったし、全体的には旧銘の方の字体が大きいこともわかった。これらから、直ちに南北朝期の製作とみなすことは簡単であろう。そして、数点の新しい様式も永和の段階で既に見られるとして良いであろう。ただ新銘と旧銘との文字の大小、配列も全く同じ、筆の運びも大差ないような感じでは、これを再考した上でないと断定できないと考える。筆者の疑問は後の機会に解決されるものとして「永和二年」銘をみてるならば、これまでの年紀のある遺品として知られる鎌倉時



赤外線写真銘

代5例、南北朝以降（14世紀～16世紀）30例<sup>9)</sup>の内では永和元年（1375）静岡県・息神社の在銘品に次いで、南北朝期では7番目に古い位置にあるものと言えよう。

66. 山本町 歩仁内一也 35.1×32.2×20

偏平な御頭様で眼形・歯の部分に朱と金泥が残る。裏には朱銘があり、「貞□□月吉日」大工善八」塗弥ユ右門」金毘羅大権□□」土崎氏宗久□□と読めそうである。これを「貞□」銘としてみると、写真68

71（宝永4年銘）との異同、変遷がはっきりする。偏平なものからボックス型へと変化しながら、牙は退化し、眉・鼻・唇が造形化を辿るというふうである。

67. 協和町・唐松神社 33.9×29.7×17.5

秋田県指定文化財。もともと偏平な型で、上下では眼球先端乃至は鼻頂部の寸法となる。柄立耳を置くべき額奥部が極端に狭く、低い位置になっている。その反動として眉の表現が直角に近い角度で立ち上がり、それがそのまま眼窩の深さとなる。眼は極端な飛出。鼻穴は、切上りの如くハの字状にあく。牙は、はめ込みであったようである。歯は1枚1枚が凹レンズ状を呈す。すなわち、左右側面で厚みがあり中央で厚みがないといった彫出法である。前歯は上下5枚ずつ刻む。

唇のうねりは連続せず、山がたの文様を繰り返す。このタイプは岩手県下では大永期の遺品に似ると言われている（北上市・司東真雄氏報）。秋田県内では写真72～75、77にその変遷が辿れそうである。

68. 男鹿市<sup>10)</sup>・金 秀信 37.7×32×21.2

66の次に位置し、66のタイプからすれば、貞享と宝永の間をつなぐパイプの如きものである。

69. 平鹿町・金峰神社 27.7×24.3×14.5

杉材か。かなり様式化された獅子頭である。古そうにみえるのは上唇の思いきった誇張。加工しやすい材ということであってか、表現も豊かではあるが、眉間の皺寄せや眼形、眉、牙の弱さなどいずれも写真からは遠い。歯は前歯上下それぞれ8枚ずつ。耳は紐綴で垂れる。江戸時代<sup>11)</sup>中期の作か。

70. 象潟町・金峰神社 42.5×35×33.5

同社蔵、延宝8年銘のものより古い作。ここでは延宝8年以前の作とする。耳は柄立立。牙はなし。舌は別材であったと思われるが、参考にあげた舌は、この獅子頭のものではないと考えられる。舌は21.5×10.8×3で中心の窪みには丹が残る。

71. 男鹿市・八幡神社 36.8×30×24.6

刻銘あり「宝永四丁亥季」六月十五日」板橋和久蔵作 百川村。

72. 男鹿市・台島十王堂 42×29.5×11.5

右頬より頭部にかけて欠失。下顎欠。写真67に近いものか。眼に丹が残る。

73. 雄和町<sup>12)</sup>・相川神明社 31.8×26.9×23.2

眼の飛出は写真67のそれに最も近い。牙は1枚の歯を刻むとともに線刻で表す。唇のうねりも線刻で表す。眉の彫出と眼形にかけてはこのタイプの古風な点である。

74. 雄和町・相川神明社 27.5×20.6×16.3

73をモデルとしたものか。

75. 八森町・宅藏院旧蔵

73・74の表現に類似。

76. 仁賀保町 稲荷神社

明治2年の刻銘あり。

77. 男鹿市

73～75と同型のもの

78. 平鹿町

平鹿町・山田貞吉氏の撮影によるもので、江戸時代中頃の作とみられる。

79. 湯沢市 岩崎公民館

国安寛氏の撮影によるもので江戸時代初期とみられる。

80. 男鹿市

船川港神明社蔵。江戸時代中期。

## おわりに

本稿を終えるにあたり、3年に1度の東北展に直接に関わることができ、博物館に在職する者としての責務と喜びを充足することができた。今回の東北の仮面展のチームは、学芸主事・益子、主事・庄内、同、嶋田の3名であったが、搬入・出の手助けをいただいた学芸主事・磯村、同・半田、主事・太田をはじめ、学芸課は勿論、総務課の全面的な支援なくしては到底不可能な企画であったことを痛感する。また、県外からの協力も大きいものであった。熊本市博の職員の方、奈良県立民博、熱田神宮宝物館、東北各地の教育委員会など、それに、文化の日の記念講演会に講師として御出いただいた国立歴史博教授・田辺三郎助先生、資



## 秋 田 県 の 仮 面

料調査のため来秋された、国立京都博の中村保雄先生。両先生には、今もって十分な謝意も示せないでいる。その意味では本稿が、何分の1かでも果してくれれば、と考えている。

秋田県の仮面調査は、はじまったばかりである。今後は、地方作とされる稚拙なもの、たとえば番楽面のような分野に拡大して、広く芸能史の中にこれらを意義づけていく必要があると考えている。

末筆ながら写真・計測関係で手助けいただいた鎌田奈穂子、展示関係での斉藤寿胤・三浦正博、三浦初子、佐藤誠子、清書での桜庭はるみ各氏に改めて御礼申し上げます。

### 註

1. 金峰神社蔵の陵王・納曾利についての所見を得られたのは、一昨年のことであった。当時、国立文化財研究所・修復技術部長をなさっていられた田辺三郎助先生が現地を訪れ、調査されたのであり、それまで、舞楽面遺品整理表にも載らなかったが、その後『雅楽界』56号（昭和56年7月）での「舞楽面遺品の探求とその研究」中の舞楽面遺品一覧ではじめて載るようになったものである。

2. 仮面展開催中に新庄市の方が持ち込んだもので、

筆者は見えていないが、当館の太田・斉藤が立ち合い撮影したものである。所蔵者・来歴とも不明。寸法は、  
32.5×16.1×15.5。

3. 『秋田県の紀年遺物』奈良修介編、小宮山出版（昭和51年6月30日）に詳しい。
4. 『秋田県の文化財』秋田県教育委員会（昭和46年12月20日）合本に載る。
5. 一説に安東実季寄進という。
6. 『古面の美—信仰と芸能—』京都国立博物館の特別展図録の列品番号258~260参照。
7. 中村保雄先生よりの写真を使用させていただいた。
8. 益子清孝撮影。
9. 『日本の美術—行道面と獅子頭—』至文堂に拠る。
10. 以下、男鹿関係の資料は、磯村朝次郎氏の調査協力に拠る。
11. 雄物川町東里の佐藤利兵衛氏の内神にて保存される獅子頭は同型と思われる。佐藤家蔵の銘は「文久元年」辛酉「文月吉日」石橋忠次郎「彫刻之」<sup>(9)</sup>となっている。彫り口の大きさ、眉間と鼻先との短かさなど多くの点が共通する。平鹿町のがやや古いとしても江戸時代初期まではさかのほらない。
12. 雄和町の資料については斉藤寿胤氏の協力を得た。



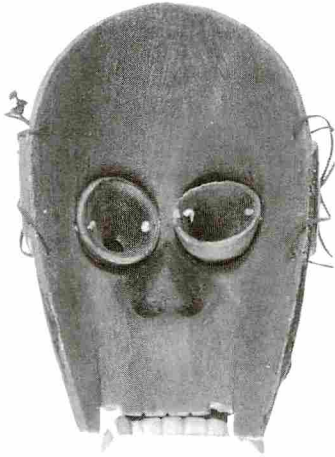
1. 陵王



陵王 (参考)



2. 納曾利



同前裏



3. ◎二ノ舞-咲面-



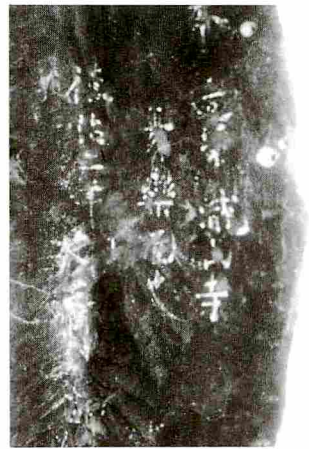
4. ◎二ノ舞-咲面-



5. 二ノ舞-腫面-



同前裏



同前銘赤外線写真

秋田県の仮面



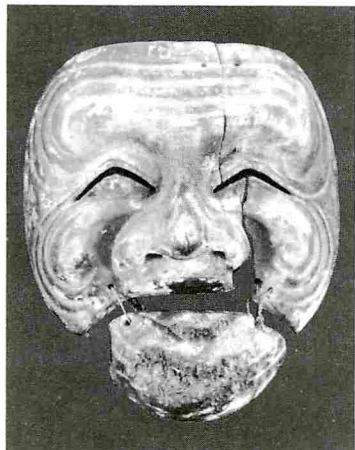
同前銘赤外線テレビ写真



6. ◎二ノ舞-腫面-



7. ◎翁



8. 翁



同前裏



9. 翁



翁(参考・鳥海町)



10. 翁



11. 黒色尉



12. 黒色尉



13. 黒色尉



黒色尉 (参考・鳥海町)



14. 父尉



同前裏



15. 鬼神-飛出一



16. 鬼神-飛出一



17. 鬼神-癒見一



18. 鬼神-空吹一

秋田県の仮面



19. 鬼神-飛出-



20. 鬼神-飛出-



21. 鬼神-癒見-



22. 鬼神-不動-



23. 鬼神-癒見-



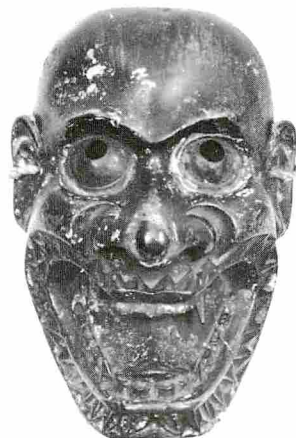
24. 鬼神-大癒見-



25. 鬼神-小癒見-



同前裏



26. 鬼神-雷-



27. 鬼神



28. 鬼神—癡見—



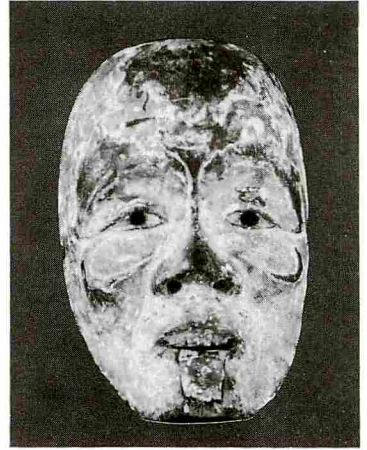
29. 男(老年)—皺尉—



30. 男(老年)



31. 男(老年)



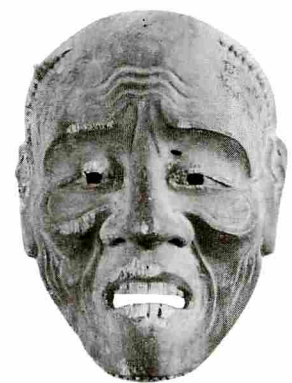
32. 男(老年)—尉—



33. 男(老年)—尉—



34. 男(老年)—尉—

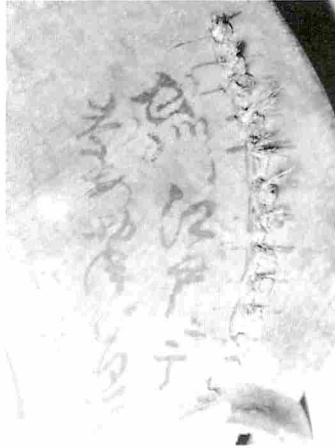


35. 男(老年)—小尉—

秋 田 県 の 仮 面



同前左額部墨銘



同前右額部墨銘



同前裏



36. 男(老年)-道化面-



37. 男(老年)?



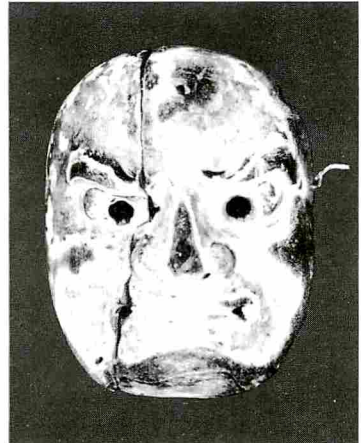
38. 男(老年)-空吹-



39. 男(老年)?



40. 男(老年)



41. 男(中年)



42. 男(若男)



43. 男(老年)-道化面-



44. 男(老年)



45. 男(老年)-空吹-



46. 男(老年)?-道化面-



47. 男(中年)-道化面-



48. 男(老年)



49. 女(若女)



同前裏



秋田県の仮面



50. 女(若女)



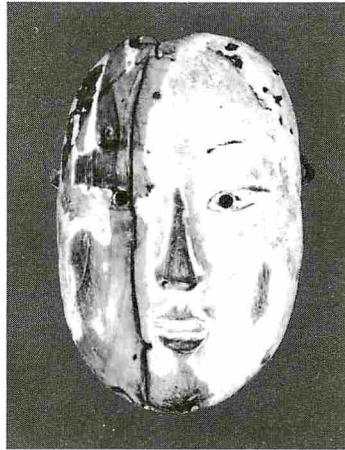
同前裏



51. 女(中年)



52. 女(若女)



53. 女(若女)



54. 女(老年)



55. 女(老年)一姥一



同前裏



尉(参考・宮城県)



同前(参考)裏刻印



56. 女-乙-



57. 靈系-山姥-



同前裏



58. 靈系-橋姫-



同前裏



59. 靈系-神体-



同前裏



行道面(参考・福島県)

秋 田 県 の 仮 面



60. 行道面—大日如未—



61. 行道面—八幡—



62. 行道面—不動—



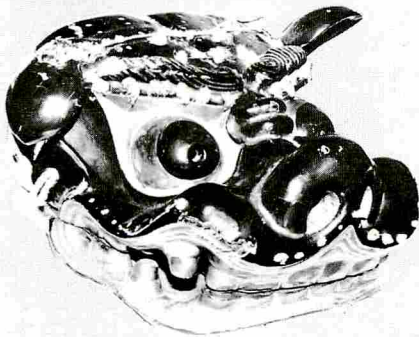
63. 行道面—普賢—



64. 行道面—文殊—



行道面(参考・山形県)



65. 獅子頭



同前赤外線テレビ撮影銘



66. 獅子頭(貞空銘)



67. ◎獅子頭



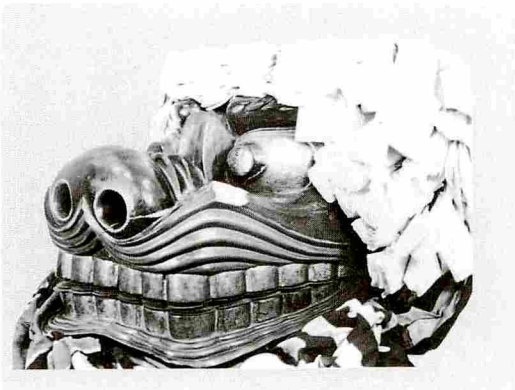
68. 獅子頭



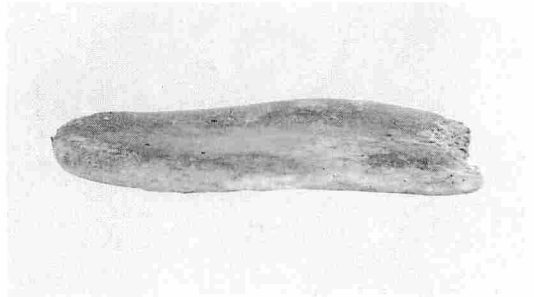
69. 獅子頭



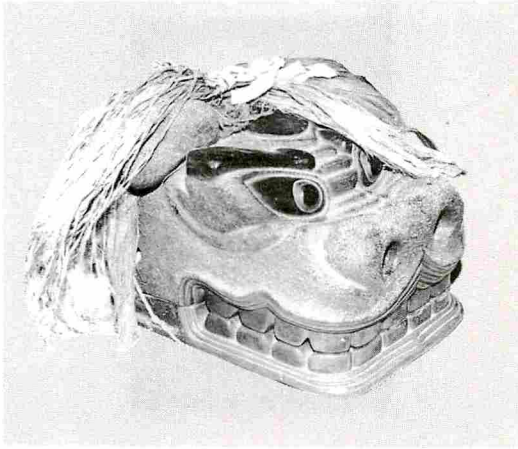
獅子頭の舌(参考)



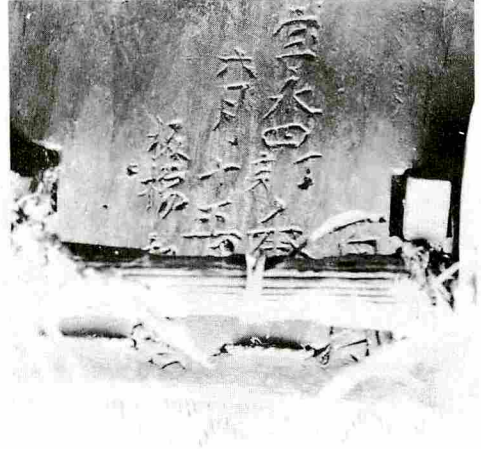
70. 獅子頭



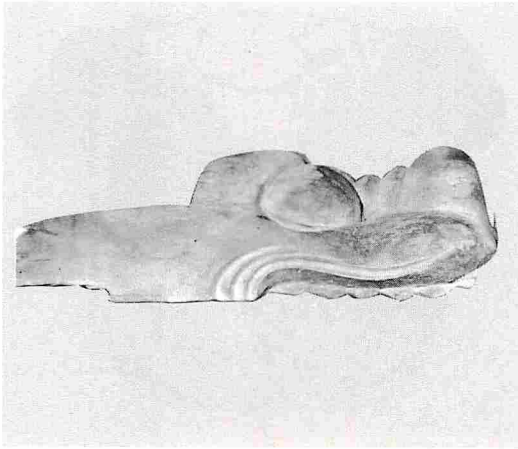
同上(参考)



71. 獅子頭



同左裏銘



72. 獅子頭



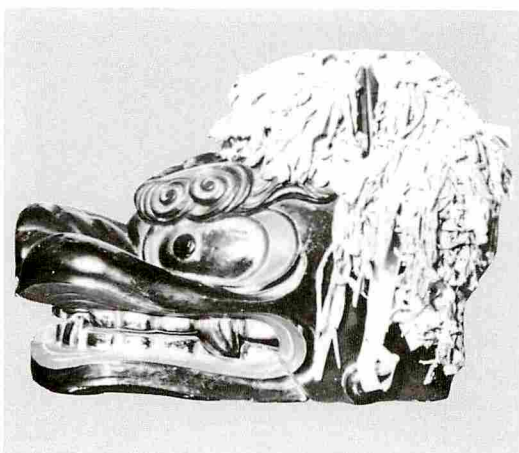
73. 獅子頭



74. 獅子頭



75. 獅子頭



76. 獅子頭



同左裏銘



77. 獅子頭



78. 獅子頭



79. 獅子頭



80. 獅子頭